

藤島宗韶詠草（宝暦七年分） 解題と翻刻

〔解題〕

本稿は江戸時代中期に新日吉社宮司であった藤島宗韶の詠草を紹介するものである。京都女子大学蘆庵文庫に所蔵される『藤島宗韶詠草』（大四三―一）のうち、宝暦七年（一七五七）に詠まれた和歌部分を翻印する。この仮綴冊子体の草稿書留には、宝暦六年の和歌も収められているが、宝暦七年分については他に、合点添削を仰ぐために和歌を清書した折詠草の『藤島宗韶詠草』（大四三―七）も遺されていることがこのたびの調査で判明した。さらに、同年の宗韶日記（『春原忠韶日記』大一一七）も現存するため、宗韶やその周辺にいた人々が誰の歌会へ詠

大 山 加 大 松
谷 中 藤 山 藤
俊 延 弓 和 原
太 之 枝 哉 静 村
美 香 咲

進し、どのような和歌を草稿から清書し、いかなる指導を受けていたかを詳らかにできると考え、宝暦七年という一年間を取り上げることとした。

本稿で翻印する草稿書留の『藤島宗韶詠草』の書誌は次の通りである。

〔整理書名〕『藤島宗韶詠草』〔著者〕藤島宗韶（自筆）〔整理番号〕大四三一―一〔目録通番〕一五九九〔外題〕打付書「宝暦六丙子年／同七丁丑年／愚案／忠韶」〔内題〕なし〔成立〕宝暦六〇七年写〔装訂・数量〕共紙表紙横本仮綴一冊〔寸法〕一五・二×二一・三糎〔丁数〕全三六丁・貼紙二丁〔料紙〕楮紙（反古）

また、右の草稿から宗韶が清書し、師の合点・添削を受けた折紙を合綴した『藤島宗韶詠草』の書誌事項は次の通り。本稿ではこのうち、草稿と重なる和歌は各題毎に和歌の後ろに二字下げ・別書体で掲げた。

〔整理書名〕『藤島宗韶詠草』〔著者〕藤島宗韶（自筆）〔整理番号〕大四三一七〔目録通番〕一六〇五〔外題・内題〕なし〔成立〕宝暦七年写〔装訂・数量〕折紙綴一冊〔寸法〕一六・〇×四三・五糎〔丁数〕全一五丁〔料紙〕楮紙

蘆庵文庫は、小沢蘆庵の顕彰のため、洛東今熊野日吉町、新日吉神宮の宮司藤島益雄氏ますおによって、蘆庵の一五〇回忌にあたる昭和二十五年（一九五〇）七月に同神宮内に設置され、その後その蔵書の大半は平成二十七年三月に京都女子大学へ寄贈された。同文庫の資料は、おもに蘆庵関係の典籍、社家文書、非蔵人文書で構成されている。

このうち、稿本『六帖詠藻』をはじめとする蘆庵関連資料については、中野稽雪氏による一連の蘆庵研究や、平成二年から始まった国文学研究資料館による調査収集事業によって、以前から比較的注目されてきた。

しかし、新日吉社に関する文書や、歴代宮司が勤めた非蔵人に関連する多くの資料は、『蘆庵文庫目録と資料』（蘆庵文庫研究会編、青裳堂書店、平成二十一年刊）が刊行されるまで広く知られていなかった。また、そ

の『目録』のうち「追加史料の部」については簡便な一覧を目録巻末にまとめるにとどまり、現在も調査を進めている。

新日吉社の歴代当主は非藏人として禁裏に出入りしており、かつ妙法院宮とも浅からぬ関係にあった。当主たちが遺した日記や文書などからは、非藏人たちがいかなる業務を担っていたかが具体的に分かるほか、堂上と地下との間を往き来できる立場にあった彼らが、文化史的に果たした役割をうかがわせる資料が散見される。このように、蘆庵文庫は、近世中後期の禁裏周辺の動向を探るために、歴史的にも文化史的にも貴重な一次資料の宝庫と言えよう。

さて、蘆庵文庫には宗韶・宗順・宗願・宗福に関する資料が多数所蔵されているが、藤島家は社家であるため、歴代当主は皆、程度の差はあれ和歌を学んでいた。とりわけ宗順の詠草がもつとも多く所蔵され、次いで父宗韶の歌稿が確認できる。このうち、本稿では藤島家初期の当主である宗韶の和歌詠草を取り上げる。

『藤島家伝』（新日吉神宮蔵）によれば、宗韶は享保十四年（一七二九）正月二日に藤野井成允の次男として誕生し、その後春原忠正の養嗣子となった。元文五年（一七四〇）二月に十二歳で非藏人として初めて出仕した。宝暦十三年（一七六四）十二月二十八日に藤島宗韶と改める前の名は「忠韶」である。安永元年（一七七三）には正六位上に叙せられ、院藏人に補せられた。つづいて、天明四年（一七八四）には従五位下に叙せられ、上北面に補せられている。天明六年に大舍人頭に任ぜられた後、寛政元年（一七八九）十二月二日に、六十一歳で没している。

宗韶の詠草資料としては、宝暦六年（一七五六）以降の詠草が書き留められた七冊の(1)『藤島宗韶詠草』（大四三一一〜七）のほか、(2)『春原忠韶歌稿』（四一五四）や(3)『藤島宗韶詠草留』（式号一二六）が現存する。このうち、(1)『藤島宗韶詠草』は仮綴冊子体の草稿が四冊と、提出詠草を仮綴した折紙綴本が三冊含まれている。後者の提出詠草には、いずれも「忠韶上」とあり、さらに添削の跡も残されていることから、師から指導を受けた折紙を、

年次別にまとめて綴じたものと考えられる。

では、折詠草へ添削を施したのは誰か。「藤島宗韶日記」の宝暦五年二月十四日の条に、「冷泉民部卿宗家卿へ和歌入門〈民部卿殿へ酒五斗進上／雑掌へ延紙二束遣／大宅大浦房長予兩人〉」と入門記録があることから、冷泉為村であった可能性が先ずは考えられる。為村は冷泉家中興の祖とされる公卿で、当代を代表する堂上歌人であった。実際、宝暦六年二月二十九日の宗韶日記には、「一、冷泉殿□詠草持参。」とあり、冷泉家へ宗韶が和歌詠草を持参していた様子が書き留められている。

添削者を推定するうえで、その為村の和歌とされる歌一首が左の宗韶の草稿書留（宝暦六年分）に見られることは留意すべきであろう。添削を受けた折詠草から示せば、左の通りである。

里雪

へあきにしめしうづらの床もあれはて、此比雪の深草の里

里遠くかへるやいづこしづの男が笠おもげにもつもる白雪

この時の草稿も残されており、そこには左のように記されている。

丑里雪十一月兼題昆経丈亭

秋まではしめしうづらの床あれて雪ぞふりしく深草の里 為村

へ里遠くかへるやいづこ賤男が笠おもげにも積る白雪

枯はつる菊のまがきに

秋にしめしうづらの床もあれはて、此比雪の深草の里

草稿の歌題の前に「丑」と宗韶が補記しているが、これは宝暦六年十一月に橋本昆経亭で催された稽古歌会で詠

んだ和歌を、丑年である宝暦七年になってから、折詠草に清書して師に示したことを意味する。草稿には提出詠草へ転記したものには黒丸や白丸などで印が付されたものもあり、折詠草に施された添削も書き写されていることが確認できる。

さて、草稿書留には歌題「里雪」の後ろに、「秋まではしめしうづらの床あれて雪ぞふりしく深草の里」という為村作とされる和歌が一首書き付けられ、つづけて宗韶の和歌二首と未完成歌一首が記されている。このうち最後の「秋にしめしうづらの床もあれば、此比雪の深草の里」は為村歌に酷似し、宗韶が参考にして詠んでいることは明白と思われる。仮に添削者が冷泉為村であるとすれば、ここからは彼の和歌指導の方法をうかがうこともできることになる。

ただし、為村歌として書き留められた和歌は『新編国歌大観』には所収されておらず、その真偽についても問題が存する。また、添削部分の筆跡も為村のものとは必ずしも言い難い。一方で、小沢蘆庵の添削である可能性も考えられることから、本稿では、添削者は冷泉為村である可能性を指摘するにとどめ、詳細については今後の課題としたい。

〔凡例〕

一、京都女子大学蘆庵文庫蔵『藤島宗韶詠草』（整理番号大43―1、通し番号1599）のうち、宝暦七年分の和歌草稿書留（14丁裏～35丁裏）を翻刻した。そのうち、「折詠草」（『藤島宗韶詠草』大43―7、1539）に同じ和歌が伝わる場合は、各題毎に、和歌の後ろに二字下げ・別書体で掲げた。その際、「折詠草」での改行は無視し、作者表記（「忠韶上」）および歌題等は省略した。但、底本（和歌草稿書留）以上の情報が記されている場合のみ（）

に入れて示した。

- 一、翻字は原則として原本通りとする。但、以下の項目については改めたところがある。
- 一、旧字体・異体字・合字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、適宜、句読点・並列点を施し清濁を分かった。
- 一、原本の改行箇所には「/」を、丁の表・裏の移り目には「|」を入れ示した。
- 一、合点は「へ」で示した。
- 一、割書部分は「へ」で括り示した。
- 一、見せ消ち部分は網掛けで示した。また、墨減部分は抹消線で示した。
- 一、虫損・抹消等による判読不能箇所は、字数が判る場合は□で、判らない場合は「」で示した。
- 一、単純な誤字訂正と認められる箇所は、改めた後の形で翻字した場合がある。
- 一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

〔翻刻〕

同七年春

冷泉民部卿為村／冷泉殿余始

庭梅久芳／冷泉殿余始出題／二月五甲

咲そはむむる花も千年の春かけて／ふりせずにはへ庭の梅がえ
今年よりいく世かさねて軒近く／猶咲にほへ庭の梅が、

此宿に千世をかさねて咲そはむ／色かもふかき庭の梅がえ

今年より

此庭にふりせずにはへ千世かけて／ふかく紐とみきそんむる梅のはつ花
色ふかき花もふりせず匂ふらん
千世かけて咲庭の梅がえ」14ウ

へ 毎春花有約（信里丈会始出題／二月十三日）

年ごとになれてもあかぬ花の木に／又くる春を猶やちぎらん

あだにみぬ花の契よ色もかも／心にかわる春やなからん

○あだならぬ花のちぎりよ春ごとに／あゆぬ色かゆさかりみすらん
色かえならぬ

あだにみぬ心とをしれ春ごとに／色香くわゝる花にちぎりて

咲そふる／花にいく世の／春をちぎりて

○へあだにみぬ花も心のの二をしるや色そふる／へて年○にかはらぬ咲句ひぬる」15オ
々々

（毎春花有約）

あだならぬ春の契よ春ごとに色香えならぬさかりみすらん

へあだにみぬ花も心のの二をしるや色そへて年○にかわらず咲句ひぬる
三 四

冷泉家月次和歌題

庭梅久芳会始（芳字ノ心／なくてはいか、）

へいく千世の猶咲そはむ色みえて／ひてにほふらし紐ときそむる庭の梅が枝

ことしよりなを行末の春かけてふりせずにはへ／庭の梅が枝

いく千世の色香をこめて咲そむる／軒端の梅の盛久しき

へいく千世も猶咲そはむ色みえて紐ときそむる庭の梅が枝
ひてにほふらし （芳字ノ心／なくてはいかゞ）

ことしよりなを行末の春かけてふりせずにはへ庭の梅が枝

いく千世の色香をこめて咲そむる軒端の梅の盛久しき

二月へ梅風廿八日会日

さそひきてさかぬかきねもにほふなり／梅咲宿の軒の春かぜ
かぜのつてなるよその梅が、

吹をくる匂ひもふかく咲梅の／花の軒端をさそふ春かぜ」15ウ

二月御兼題
（梅風）

へ此夕べさかぬかきねもにほふなり風のさそひしよその梅が、

吹おくる匂ひもふかく咲梅の花の軒ばをさそふ春かぜ

同へ祈恋

あふことはいのるかひなくいたづらにうき年月かふるの神杉

かけそへて猶もいのらんみしめ縄たのめ置にし／ながき契りを

へあふことはいのるかひなくいたづらにうき年月をふるの神杉
を

かけそへて猶もいのらんみしめ縄たのみ置にしながき契りを

芦火たく煙も波も立かすむ難波浦の春のよの月

すむ月の秋はありとも梅が、のそひてかすむもい、しらずして

芦火たく煙もかすむ難波がた／入江の波に霞月かげ

三月十八日

〱名所春月

いひしらずよえならずよ梅が、かほる難波がた入江の波にかすむ月影霞入江の春の夜の月

影やどす宇治の川波はれやらでほのかにてらす春のよの月

所がら光かはらず明石がた霞もやらぬ春のよの月

所がら霞もやらで明石がた月にさわらぬ浦のみるめは

浦風に霞もはれて明石がたくもるともなき春のよの月

三月御兼緒
（名所春月）

〱浦かぜに霞もはれて明石がたくもるともなき春の夜の月

えならずよ梅が、かほる難波がた入江の波にかすむ月かげ

同〱鐘声何方

かねの音は声いかゞなるらん花にきてくる霞もふかくくる、山路に

いづくともわかずや花にくれかゝる霞のおくにひゞくかねのね

ひゞきくるこゑもいづくと詠やる霞のおくの入相のかね

花にきてくる、山路にひゞきくる何方なるらん入相のかね」16才

かねの声はいづくきこゆるなるらん花はいつくの寺のにきて霞もふかくくる、山路に

〱ひゞきくる声はいづくこそとながめやる霞のおくの入相のかね

四月〱籬卯花

花の木はひとつみどりにしげりおふまがき

花の木はみどりにしげるませの内に青葉まじりに咲る卯花

●夕やみに月やあらぬと白妙の色をまがきにみする卯花

月雪の色を 色をまがきにみする卯花

ませの内に光りもみへて木の間もる月やあらぬと咲る卯花

●月雪の光りをみせて由妙にまがきに咲る夏の此比

卯花の

月影の光をそへて卯花の咲る垣ねは木がくれもなし

四月御兼題
籬卯花)

木の間もる月やあらぬと白妙の色をまがきにみする卯花

～月雪の色にまがひて卯花のまがきに○咲る夏の此ごろ

同～逢増恋

人もかく思ひもやせん逢夜よりい^{またいつかはと}した^{ふ心}は

わりなくも思ふものからいと猶人に思ひのそひ行もうし

へだてなくか^{わす枕は}逢^{夜よりいと}人もかく同じ心^{ありやせん}逢夜よりやがてまさる思ひは

へだてなくかわすものから逢夜よりい^{やまさりぬる}むねの思ひは「16ウ

人もかく同じ心^{ありやせん}逢夜よりやがてまさる思ひは

～へだてなくか^はち^{ぎる}ずものから逢夜よりい^{やまさりぬる}むねのおもひは^{くるしき}

五月霖

いつはる、空ともみえず雲とちて降こそまされ五月雨比^マ

かきくれておやみもやらず降くらす雨に

はれやらず日をふる雨に波こえて入江の芦もみえぬばかりに

入江なる芦の末はの先ぞかくる、

々 夢

おもふことおもはぬことも一すいの枕の夢となるぞはかなき

旅宿

よなくにかわる旅ねの夜半の風いとゞ淋しく故郷の夢

六月夏草

夕立のはれ行跡の草むらにむすぶも涼し露の白玉

咲出る花も夏野、草むらにまじるさゆりの色もえならぬ

しげりあふ草のみどり置そふ露も色にて

はらはねば日ましことにしげる夏草に野守が庵もみえず成行」17才

恋山

公文

おくふかくおもふ心をかくとしもいはで忍ぶの山の名ぞうき

あはでうき思ひもぞそふしのぶ山しのぶ心のふかき思ひは

かくとしもいはで幾年

あはでうき思ひもぞ、ふ人しれずしのぶの山のしのぶ思ひは

うきことの猶こそまされ

七月早秋暁露

明るまでまたで置そふ白露を吹みだしてや庭の暁の空

旅人渡橋

日影のみみえてぞのこる夕暮に旅人いそぐ勢田の長橋」17ウ

八月月前風

月前思

九月黄葉

かばかりにそむる柞の薄紅葉

秋ぞとやや、染かゝる薄紅葉

時ぞとやいつの時雨の染つらん初しほみする木、の葉かづら」18オ

山家夕

字脱

廿一日 山ふかく住身はうしや夕間暮さみしさそふる軒の松風

廿二日 山里になれてもうしや夕たべく淋しさそふる入相のかね

廿三日 山深み住身はうしや夕暮にいと淋しき入相のかね

十月しぐれ

ちぎる」18ウ

十一月湖上冬月

古寺夕鐘 定親

十二月遠炭竈」19才

寄松恋

浦鶴

吹風に打よする寄波もしづまりて松かぜちぎる友鶴のこへ

十一月廿二日

行路雪 信里丈兼題

へ行かよふ路もわかれず野べはいまひとつにうづむ雪の白妙

早春霞

こいそつに見し雪しかとげの空も立かへてけふより春と霞長閑さ

さほ姫の霞の衣打かけて今朝より春とかすむのとけさ

山のはも松杉もかすみなからに明めてそむる今朝より春の色をみすらん

月

吹風に夕霧はれてさへ宿る□ぬ光りの浦の月かけ

見る人のこゝろもすめる須磨の浦の月影さむき秋の宵（ついで） 19ウ

雪中鶯

春めきて尚白雪も故郷のみかきが原に鶯のなく

松梅の梢はこぞの雪ながら声さむからぬ春の鶯

春きてもこぞのまゝなる雪の内に声さむからぬ春の鶯

春きても猶白雪は故郷にひとりのだけき鶯の声

暮竹のねぐらにつもる雪の内に声さむからぬ春の鶯

梅がえに同じ色そふ淡雪を木づたひちらす春の鶯

行路梅

行路路のへのかたへに咲て行人もしばしとまれと匂ふ梅がえ

春月幽

もしほやく煙の外も立ちおほふ霞に雲る浦の月影

名所月

秋風に空吹はらふ高砂のの尾上の松をてらす月かけ

吹風に村雲はれてさへ宿る月の光の須磨の浦波」20オ

へ夜虫

へ宗韶

へ小夜ふかくねやに音づるきりくす／枕の夢をさそふ声く

へ連夜見月

へ宗韶

へかげたかき山をうつして水海や／さなみよする岑の松風

へ時雨

へ栄香

へこの朝けそらに時雨て／雲（上脱カ）まふあらしの寒み／冬は来にけり」20ウ

名所龍

布引龍 亀尾龍 音無龍

名所杜

篠田杜 衣手杜

名所川

宇治川 龍田川 名取川 大井川／鵜川 音無川 白川」21オ

名所松

高砂松 三保松 尾上松 唐崎松 壺岐松／曾祢松

名所橋

勢多橋 宇治橋 長良橋 月橋／阿广橋立 宇治橋姫 久女岩橋 古高橋

名所山

比良山 比叡山（エイ） 富士山 松尾山／稲荷山 春日山 三輪山 龍田山」21ウ／足引山（日本／惣名言）

名所市

白川市 辰市 八日市 四日市／丹波市 売間市 三輪市

名所関

白川関 相坂関 安宅関 箱／根関」22才

(22ウ・23才空白)

〱竹二月十五日冷泉家会始当座

生そふる小枝に春の色そへてあかぬみどりになびく呉竹

〱ふる雨にいと小枝のみどりの色そひてなびくもあかぬ庭のくれ竹

〱初冬時雨〱二月十三日信里丈亭／当座

未吹かぜもきのふの秋の音かへて今朝より冬と時雨降也

〱風の音もきのふにかわる神無月空にしくれ冬マは来にけり

未いつしかと嵐はげしく音たて、時雨る、空に冬は来にけり

● いつしかと冬もきぬらん此朝け時雨て渡る風のはげしさ

いつしかと冬もきぬらん此朝け時雨て渡る風のはげしさ

〱風の音もきのふにかわる神無月空にしくれて冬は来にけり

〱山居春曙〱常芳丈田年／補二月廿二日被催兼題

高ねより麓をかけて咲つゝく花よりしらむ春の曙

山の端は霞の内に明やらで花よりしらむまどの曙

立かくす霞の窓にほひつゝ、

山姫の霞の袖に匂ひつゝ、横雲はる、峯の花ぞの

山里は霞の内に明やらで月かげのこる春の曙

立かくす霞の窓に匂ふなり花横雲はる、峯の花園よりしらむ曙山

山里の松の梢のみえそめて花よりしらむ春の曙

山里の松は夜ふかく霞ともむらくゝわかる曙花

山の端に霞て月も有明の花よりしらむ窓の曙」23ウ

〱山のはにかすみて月も有明の花よりしらむ窓の曙

山の端の松は夜ふかくかすみつゝ窓より匂ふ曙の花

（以上、「寄原恋」「磯巖」と同じ折詠草に記す）

立かくす霞の窓にはふなり横雲はるゝ峯の花その

山里は霞のうちに明やらで月かげのこる春の曙

（両首ともに類題、／範宗雅経卿之歌に／多似候。言葉も置／所もかはらず候。）

〱寄猷恋

われにうき人はしらじな待わびてひとりふすぬの床の露けさ

うきにのみ思ひみだれていく夜半かひとりふすぬの床のくるしき

かくぞとはいつかしられんうき人をおもひふすぬの床の露けさ

しらせばやふすぬのかるもかくばかり露にみだれてむせぶ思ひを

われにうき人はしらじな待わびてひとりふすぬの床の露けさ

〱うときはにねのね思ばひねみねだねればてばいねくね夜ね半ねかねひねとねりねふねすねぬねのね床ねのねくねるねしねさ

（以上、「柳風」「春月」と同じ折詠草に記す）

〱柳風 二月廿六日番所に而 / 当座

置露も玉とみだれて青柳のみどりうら、になびく春風
朝なく置そふ露の玉柳たまりもあへずなびく春風
ふくとなき風にみだれて打なびくみどり長閑春青柳

朝なく置そふ露の玉柳たまりもあへずなびく春かぜ

〱置露も玉とみだれて青柳のみどりうら、になびくはる風
※打はへて

〱春月 同廿九日番所に而 / 当座

立おほふ霞の間よりほのくともれいで、匂ふ春の夜の月
さやかなる影は霞にへだ、りておぼろにてらす春のよの月
軒ばもる影も霞て咲花の梢に匂ふ春のよの月

〱軒ばもる影もかすみて咲花の梢にほふ春の夜の月

〱さやかなる影はかすみにへだ、りておぼろにてらす春のよの月

〱春雨 三月三日番所当座

降ま、にくる、もみへず春雨の音もしづけき
霞にまじる音もしづけき
かきくれて降ともみへず春雨の真地しめる
此夕 砂脱カ

ぬれて今朝かきねの草色そひて降音淋し庭の春雨
マゴぞ、ふ

かきくれて降ともみへず春雨の雨尋夕にしめる真砂地
マゴ

降ま、に音も淋しく雨かすむ夕べに落る軒の玉水」24才

へかきくれて降ともみへず此夕真砂地しめる庭の春雨

降まゝに音も淋しく雨かすむ夕べに落る軒の玉水

へ帰雁六日

故郷にいかちぎりて春の雁花をみすて、帰り行覧

○故郷の道まどふまで立こむる霞に消る春の雁がね

ながめやる空もいく重の八重霞立へだゝりて帰る雁がね

故郷にいかちぎりて春の雁花をみすて、帰り行覧

ながめやるそもいく重の八重がすみ立へだゝりて帰る雁がね

へ雲雀九日

すみれつばな花咲のべの遠方にあがる雲雀の声の、どけさ

声のみにすがたはみへず夕あがる

声たかくあがるとみしも夕雲雀霞末野にまたや落くる

すみれつばな花咲のべの遠方にあがる雲雀の声の、どけさ（五文字ながく、耳に立候。）

へ声たかくあがるとみしも夕ひびり霞末野にまたや落くる

杜花

色も香も常盤ならなん松立る杜の木の間にみゆる桜は

これも又たくひやはなき色はへて杜の木の間の花の夕ばへ

へ野外雉子（三月十三日親教丈／会兼題）

霞しく草のみどりの野を遠み妻こひかねてきゞす鳴也
霞しく片山野への草がくれ妻やこもるときゞす鳴也

きゞす鳴ありかぞしらね草がくれかすめる春の野への遠かた

●恋わか草のわびる妻やこもると音にたて、霞末の雉鳴也

●こゑにこそマとしらるれ床しめてきゞす鳴の、霞夕暮」24ウ

(野外雉)

声にこそマとしらるれ床しめてきゞす鳴の、霞夕ぐれ

〓恋わか草のわびる妻やこもると音にたて、霞末野にきゞす鳴なり

〓浦舟 (三月廿五日昆経文亭 / 当座)

夕なぎに浦はを遠み漕出て波にたゞよふ玉もかり舟

浦遠く夕日晴たる波の上に数くみへてゆるうかぶ釣舟

○浦風の吹のこしてや波の上あまのにうきてたゞよふ沖の釣舟

漕出て

夕なぎに浦はを遠み漕いで、浪にたゞよふ玉もかりふね

〓浦遠く夕日晴たる波の上に数くみえてうかぶ釣舟

〓緑樹連村暗

松桧原楓かしは木の陰ふかくみどりにしげる木がくれの里

露夏ながらしげる若ばの陰ふかく晴やらぬ色や木がくれの里

陰ふかくしげる若ばの晴やらずみどりにつく里の木がくれ

花の木も 若ばしげりて

松桧原楓かしのしげりあひてありともみえぬ木がくれの里

〱 陰ふかく若葉しげりて夏山のふもとの里もみえぬばかりに

〱 磯巖

むす苔のみどりをあらふ白波のよせてはかへる磯の岩ほに

苔のむす巖に生る松がえの下枝をひたす磯の白波

波もてあらふ磯の岩がね

打よする磯の岩ほにむす苔のみどりをあらふ沖つ白波

ちりもつもらぬ磯の岩がね

よせかへる波もてあらふ岩がねはちりもつもらぬ」25才

〱 寄原恋 〈小笹原さ、の一夜もあはでうき人／をばかくも思ふはかなさ〉

小笹原さ、の一夜も夢にだに見ぬ面影をしたふわりなさ

いたづらに思ふかひなくいく年か同じつらさにいきの松原

むすびける契りもはかな小笹原さ、の一夜の露契りは

あはでうき人をばたのむ 思ひはかなき

小笹原さ、の一夜もあはぬ身の思ひもはかな

うき風のはらふもつらし草の原むすびもとめぬ露の契を

四月八日より百首組題

立春

一よあくる空に霞の立そめて出る日かげも四方にのどけき
明渡る空ものどかに出る日の光りの

出る日の光りのどかに明渡る空に霞て春はきにけり
けふといへば空もかすみて何となく出る日影のどけかるらん

山霞

松杉のみどりのどかに足引の山の端立けり遠く霞棚引

松杉の梢もはるの色にけさみどりかすめる山の端のどかに

朝声明て見渡山も春の色に今朝は霞の立かさぬらん遠近に

海

もしほやく浦の煙もよる波も立こむめて霞にこむるそれともみえぬ春の海原

和田の原かぎりやいづこ白波も霞よりたつ春の海づら

もしほやく煙も波も立こめて霞にわかぬ春の海原

初鶯

いとはやも谷の戸出此朝けて鶯の初音ならする鶯のこゑ

また咲ぬ梅の梢立枝に鶯のまだ里とけやらぬなれぬ初音をぞ聞軒近き

若菜

春もまだ浅沢小野に打まれてみどりのわかたとめてこそつめ
諸人の袖打はへて雪きゆる沢べに出て若なをぞつむ

白梅

降おける雪と見えるまで白妙に咲てぞ匂ふ軒の梅がえ

山がつの宿の垣ねにのこる雪のおもかげみせて咲る梅がえ」26才

紅梅 （夕づく日さすや軒ばの梅の花／紅ふかき色ぞ、ひゆく）

雨はる、軒ばの花も露ながら

色もかもたくひはあらし紅のこぞめの梅の花のさかりは

雨はる、名残の露に紅の色そふ梅の花ぞえならぬ

河柳

枝たれてながら岸根になびく青柳の緑の糸をあらふ河水

河水にかけをうつしてよる波もみどりにそむる岸の青柳

春雨

降ま、□晴やらでにくもあもみえず春雨の霞にまじる夕暮の空

□□のみにふるともみえず春雨の霞て落る軒の玉水

空とちてくもるとばかり春雨の霞て落る軒の玉水

春月

吹となき風に霞のはれ行ておぼろげならぬ春のよの月

帰雁

故郷の道まどふまで立こむる霞にきゑて帰る雁がね

尋花

咲花のありやとけふも尋つゝ霞いく重の山を分きて
けふも又霞むいく重の峯こへてや、咲そむる花もありやと

朝花

此朝け夜の名残の露ながらぬれて色そふ花ぞえならぬ」26ウ

落花

さかりぞとみるほどもなく咲花を心さそふもつらきませの春風つよくもさそふ春風

春駒

草はみなひとつみどりわかへりに 霞末野にあそぶ春駒

苗代

ますらおが田面はるかにせき入る水もゆたかにまつる苗代
山川のながれを分てますらをが水せき入る小田の苗代
山川のながれを分てせき入る水もゆたかにまつる苗代

躑躅

夕附日下てる山の岩つゝ、じ紅ふかく色まさりけれ

歎冬

花はみなちりし垣ねに春の色の名残をみせて咲る山吹

花の名をとへどこたへぬ口なしのいわぬ色にや井手の山吹
花はみなちりにし後の庭面に春のなごりと咲る山吹
ちりし垣ねに行春の名残の色をみする山吹
かたみと咲る

松藤

汀なる松にかゝりて池水に紫ふかくうつす藤波
常盤なる松の梢に藤かづらかけて久しき

我が宿の松の梢に

二葉より木高き松に藤かづら年なみかけて咲にほふらん

暮春

名残をぞ思ふ
あかぬ色ねもけふのみと暮行春の入相のかね

花鳥の春の名残もいつしかとけふのみとなる

花鳥の色ね
咲匂ふ花ものこらず春暮て行かたしらぬ名残をぞ思ふ

きくに猶名残もぞ、ふ暮て行春の別の入相のかね」27才

首夏

卯花

夏木立しげる垣ねに卯花の青葉まじりに咲る卯花
此比ハ
此比

白雪の色にまがひて山里のしづが垣ねをうづむ卯花
に咲る

白雪のおもかげみせて咲そふや卯花山の盛なる比

挿葵

むかしよりのたえぬ葵のもろかづらいく千世かけてかざす宮人
神まつるけふのみあれの葵草いく千世かけてかざす宮人

五一 菖蒲

露かゝる袂も涼ししげり生る池の汀のあやめかる手に

郭公

まちつけてきくもほのかに時鳥雲ゐを過る夜半の一声

早苗

雨はる、門田の早苗露ながらなびくも涼し夏の夕風

夏草

夏月」27ウ

梅雨

鶉川

夕顔

夕立

杜蟬

納涼

夏祓」28才

(以下28才〜29ウは、宝暦七年より後の書入れか)

へ水辺菊

此川をながるゝ水に白ぎくの枝をひたして匂ふばかりに
枝ひたす川のほとりに咲そひてたつ白波もかほるばかりに
川ぎしに咲そふ千代の白ぎくもよる白波にひたすかた枝
秋毎に咲そふ枝を行水にひたして匂ふ千代の白ぎく
行水に枝をひたして咲匂ふなを秋毎に咲る白ぎく

へ岡上月

へ池水鳥

吹風に水のこぼれる」28ウ

しめゆひしまがきに千世／の秋かけて盛久しく／匂ふ白ぎく

十二月

池水鳥

杜神楽

初春

明和五戊子年

紅葉

今朝の間のつゆや時雨に／一入の色てりまさる庭の□紅葉」29才

しめゆひしまがきの内花もに／秋毎に猶色そひて匂ふ／白ぎく」29ウ

（30才～32才空白）

へ杜初冬六月廿二日相美丈亭当座

今朝よりは嵐を寒み吹たつる杜のかれはの音ぞ淋しき

へ冬きぬとさそふ嵐の音かへて吹もはげしき木枯の杜

へ冬きぬとさそふ嵐の音かへて吹もはげしき木枯の杜

今朝よりは嵐を寒み吹たつる杜のかれ葉の音ぞ淋しき

松上藤補

〱 山家水々

〱 慶賀々

〱 納涼風 (六廿二相美文ノ兼題)

一声の秋ある松の夕風に向ふも涼し池のさゞ波

たちよればすゞしさあかず吹風にちかき秋しるならの下かけ

しげりあふ楓かし小の陰は猶すゞしさあかぬ袖の夕風」32ウ

夕立のはるゝ木かげはならのはの

夕立も晴行木々の下かけは露ちる風の袖に涼しき

〱 螢 (盛房丈追善和歌、七月三日於東山智福院、当座ノ相催組題之内)

過ぎつる跡とふ露もふかき夜に哀螢のみだれ飛かふ

〱 露(か脱)ふき草のまがきにきへくるゝやらぬより消ぬ思ひをみせてに 螢飛かふ

いとゞ猶あはれもぞそふ

過ぎつる跡とふ露もふかき夜に哀螢のみだれ飛かふ

〱 露ふかき草のまがきに三くるとやらぬより消をみせてぬ思ひをみせてに 螢飛かふ

〱 雪

きのふけふと思ひし春もうつりきてふりつむ雪に忍ぶいにしへ

～思^{しの}ふぞよ花も紅葉もい^{ちりはて}つしかと雪^{ふりける}○に成^{宿の}こし哀むかしを

降まゝにつもりもやらでいつしかとはかなくきゆる水の上の雪
ともに見し思ひもそひて此夕べ積るもふかき庭の白雪

～思^{しの}ふぞよ花も紅葉もい^{ちりはて}つしかと雪^{ふりける}○になり^{宿の}こし哀むかしを

きのふけふと思ひし春もうつりきてふりつむ雪に忍ぶいにしへ

雨後草花（為雄丈亭／兼題）

雨はれて置白露も百草の花のさま／色をわけ、ん」33才

～月契千秋（八月十二日／冷泉家会当座）

～此宿に千年の秋を契り置てくまなき月の影ぞてりそふ

雲霧も晴てぞこゝにあきらけき月に千年の秋を契らん

～此宿に千とせの秋をちぎり置てくまなき月の影ぞてりそふ

雲霧もはれてぞこゝにあきらけき月に千年の秋をちぎらん

～麓納涼（八月廿二日／昆経丈当座）

～紅葉増色（九月廿二日／兼題玄福丈）

此程の露や時雨に幾入も染て色ます庭の紅葉々

露霜に幾入染てこれぞこの秋の色とや染る紅葉々

へ常盤木の中にわかれてこれぞこの秋の色とや染る紅葉々

夕日さすかた山かけの紅葉々は尚一しほの色ぞ、ひゆく」33ウ
時ぞとやいつの時雨の染ぬらん初しほみする木々の葉かづら
露時雨染るがうへのからにしきさしもてりそふ木々の紅葉々

へ夕木枯（九月廿二日当座／信里丈亭）

●紅葉々をさそひつくして木枯の松にはげしき夕暮の声

夕間暮枝吹しほる木がらし音もはげしき風のさむけさ

吹さそふ紅葉もなくて夕月の影すさまじき木枯の庭

●染のこす枝の紅葉を此夕さそひて過る木枯の風

へ夕月のかげもあらはに落葉して松にのこれる木枯の声

くれつぐる鐘のひゞきに吹しほる声

にまじりて吹かくるよその梢の木がらしの声

一葉だに今はのこらで木枯の時雨をさそふ音はげしき

へ紅葉々をさそひつくして夕間暮松にはげしき木枯の声

ちりのこる枝の紅葉を此夕さそひて過る木枯の風

へ月照網代（十月廿二日／兼題信里亭）

川霧の晴間にみれば朝日山かけなるせゝに茂き網代木

浮雲
素霧も川風さむく吹晴月にさやけき宇治の網代木

波あらし宇治の渡りにてる月の網代木てらす影も寒けし

瀬に茂き網代をてらす冬の夜の月影寒き宇治の川波」34才

ひをのよる
瀬に茂き網代をてらす冬の夜の月影寒き宇治の川波

浮雲も川風さむく吹はれて月にさやけき宇治の網代木

雪（十一月廿二日／兼題 予）

民部卿殿出題
寄鶴祝（善長丈母儀／七十賀勸進）

●此宿に千とせ万代かさぬべきよはひや契る鶴の毛衣

●七十のけふより後も末遠き千世にや千世を契る友づる

いく千世もへぬべき宿の砌にはよはひを契る田鶴も馴きて

今年より千世を友なふ此宿によはひを契る鶴の諸声

末遠きよはひをこゝにちぎり置て砌になるゝ鶴の諸声

浦夏月（十一月廿二日／当座）

浦波のよする蘆辺は夏かりのみる程もなきみじかよの月

影てらす浦はの蘆は」34ウ

涼しさは波ともいはし志がの浦や月影ながらよするさゝ波

波よする浦風涼し釣舟の波間に月の影もつかびて

民部卿殿御出題
冬懐旧（五十年忠／造酒司松林勸進）
父若狭守

●いとゞ猶袖やぬれそふ村時雨ふりにし跡をしたふ涙に
思ひいづる袂はさぞなしほるらん

五十年の跡とふけふの

いにしへを思ひ出ればはれやらで時雨ふりそふ

いにしへをしたふ涙の袖に時雨る、

五十年の過し

いにしへをしたふ涙のはれやらで跡とふけふの空に時雨、

五十年のむかしを遠く思ひ出てはれぬ涙の空に時雨る、

五十年のむかしを遠く思ひ出てしたふ涙その袖に時雨る、」35才

五十年のむかしを遠く思ひ出てしたふ涙の袖に時雨る、

へいとゞ猶袖やぬれそふ村時雨ふりにし跡をしたふ涙に

花洛月（八月兼題／昆経）35ウ

〈キーワード〉

藤島宗詔 小沢蘆庵 冷泉為村 和歌詠草 添削 非蔵人 新日吉社